



# ダッカの地で まだまだ頑張り続けたい



ダッカ日本人学校 小平 勇喜

昨年7月、私の勤務するバングラデシュダッカ日本人学校のすぐ近くで日本人殺害のテロが起こり、生活は一変した。いまだ続いている外出禁止令。「自分の身は自分で守る」といった危機意識が自然と体に染みこんできた。

がしかし、バングラデシュが常に怖い雰囲気をもった国かといえそうでもない。テロはこの国の一部での出来事であったに過ぎず、私の



本校舎の前の道路

知る限り、バングラの方々は皆温和で陽気な性格の方々ばかりである。また、その人懐っこさからか、気がつくとも許可も無く私の息子がバングラ人に抱っこされている。一方で周りに目を向ければ、大気汚染によるスモッグの中を昇る朝日や夕日も見ごたえがあり素敵である。インコのようなきれいな鳥が、毎朝ベランダに飛んできては我々家族を和ませてくれる。生活の中にイスラム教という宗教があるというよりも、宗教をベースに生活があるといった空気がなんとも新鮮だ。日々バングラ人の温かさに包まれながらの生活にして、新たな発見の毎日。飽きることはない。

テロ以降、本校舎の防犯工事が開始され、現在は仮の校舎で過ごしている。仮の校舎と言ってもちょっと大きめの一軒家。校庭などあるわけがなく、



学習発表会 (H27本校舎校庭)

10畳くらいの広さの部屋を体育館に。次に大きい6畳ほどの部屋が職員室に。教職員含め総勢35名にとっては手狭であるが、一時は閉校するのではないかと心配されていただけに、狭くても学習する場があることだけで感謝しなければならない。

「現地の特徴を生かした学習をしたい」と、まだテロの起こる前、無理を承知でお願いした。その結果、警察の厳重な警備の助けを借り、小学校1、2年生がベンガル語を使って自分たちだけで買い物をする事ができた。国内がダメなら海外と考え、保護者の力をお借りし、マレーシアへ修学旅行に行くこともできた。最近ではTV電話を使い、日本の学校との交流も行った。数少ない体験を通して、実践的な力を身につけていこうと、子どもたちのやる気は本物であった。そのやる気は我々教師を動かし、日々の授業にもより力が入る。



昨年度の卒業式

夏休み明けの9月には、いよいよ防犯工事の終了した本校舎へ戻ることができる。高さ20mにもなる外壁に囲まれ、要塞と化した本校舎。ただ、これだけの設備を整えたとしてもテロは突然やってくるものであり、我々教職員のテロに備える意識が低ければ、これらの設備はなんの意味もなさなくなってくる。つまり緊張感ある日々は依然として続くわけである。心休まる日はいつやってくるのであろう、と不安な日々であるが、周りには、学びたいと強く願う子どもたち、必死に学ぼうとする子どもたちがいる。いつも温かく接して下さるバングラの方々もいる。だからこそ私はこの学校、ダッカでまだまだ頑張り続けたい。